

～はなもものブルーイングを抑える～

～横浜川崎地区事務所

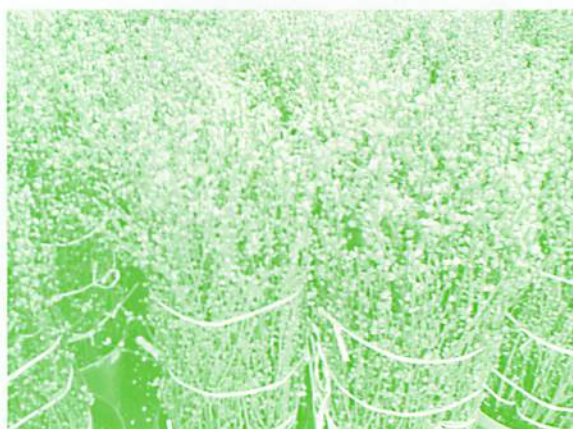


3月3日の桃の節句に欠くことが出来ないはなももの切り枝生産は、川崎市馬絹地区を中心に古くから行われています。通常は早咲きで桃色の品種「矢口」の2年以上育てた枝を畑から切ってきて、出荷に見栄えよくなるように結束（「枝折（しおり）」という）し、23℃前後の室（むろ）の中で促成して出荷しています。その際、気候や枝の状態などにより、花蕾が紫色を呈し、開花しなくなる「ブルーイング」と言われる症状を起こすことがあり問題とされていました。

現場では、エチレングスの発生、枝の持っている栄養分の量、室温と湿度の関係などがブルーイングの発生要因として考えられ、様々な対策が試行されましたが有効な方法はありませんでした。

そこで、当所では実態調査を行うとともに室の蒸かし条件の設定を変えて再現試験を行い、枝中の栄養分である糖が主な原因である事をつきとめました。そして、蒸かし中のつけ水に3～5%の糖を添加する事によりブルーイングの発生を抑制できることを明らかにしました。

現在、研究会などで糖の添加や糖分の入った前処理剤の使用を奨励するとともに、さらに効果的な対策を確立するための調査研究を実施し、枝物の高品質生産による、地域農業の振興の支援を行っています。



パーカッション採土器を用いた深層土壌の調査

～農業環境研究部



パーカッション採土器は、深層の土壌サンプルを採取するための装置です。太さ約5 cmから15 cmのパイプを、油圧の力を利用して深層まで徐々に叩き込み、最大で5 mの深さまでの土壌サンプルを採取することができます。

畑に肥料をまいて耕うんした場合、通常は20 cm程度の深さまでの土壌が耕され、土壌と肥料が混ざり合った「作土」と呼ばれる、柔らかく養分豊富な土層が形成されます。作物はこの「作土」に密に根を張り、養分や水分を吸収します。しかし作物の種類によっても違いますが、実際には1 m程度の深さにまで根を張り、作土の下層に溶け出した養分も吸収しています。これまで、我々が農耕地土壌を調査する場合は、根が主に張る1 m程度の深さまでに注目して調査を行っていました。しかし最近では、更に深い層の土壌も調査し、植物に利用されなかった肥料成分が、これまで注目していなかった深層にまで流れ出ていなか調査しています。パーカッション採土器はこのような深層土壌の調査に活用されています。